今治歴史散歩

大　成　経　凡

今治の埋もれた、魅力ある歴史文化を紹介するコーナーです。第40回は、かつて日吉地区浅川沿いにあった茶堂の由来を紹介し、江戸後期の遍路文化などを歴史散歩したいと思います。

第40回　日吉茶堂と弘法大師像

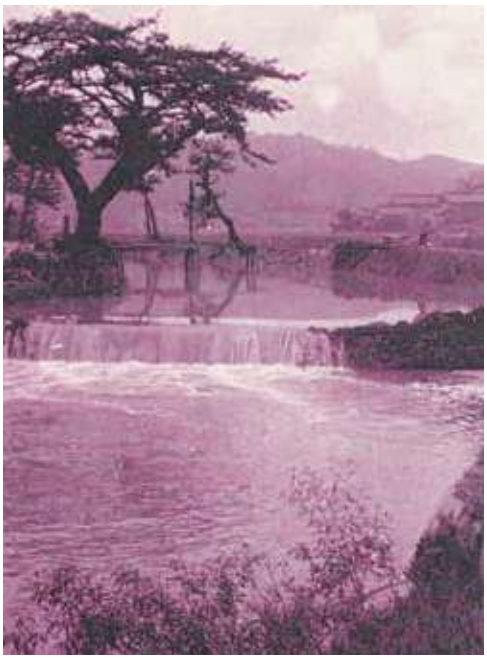
●日吉茶堂と城山（しろやま）のいわれ



茶堂橋付近の現況（今治市北日吉町～山方町・宮下町）

今治北高校から浅川を少しさかのぼった県道38号沿いに、せとうちバスの停留所「茶堂」があります。しかし、周囲には他所の遍路道で見かけるような休憩所のお堂は見当たりません。高井城・城山ハイツ入口と県道を結ぶ、浅川に架かる橋にも「茶堂橋」の名があり、そこから南東へ常盤町に向かって延びる街路が城山通りとなります。この城山の地名は、当所丘陵に日吉御城山城（左右都城とも）という戦国時代の城山があったことに由来するようです。

「茶堂」は、四国八十八ヶ所霊場の延命寺と南光坊をむすぶ遍路道沿いに位置しています。昭和７（1932）年発行の今治市街地図にも、茶堂橋右岸に茶堂が表記され、昭和戦前の絵葉書には「日吉茶屋」が今治の名勝として登場するのです。現在、茶堂橋袂には江戸後期の弘化４（1847）年に造立された道標があり、札所への距離を示す「延命寺江二十八丁」「別宮江八丁」などの銘が刻まれています（１丁は約109㍍）。



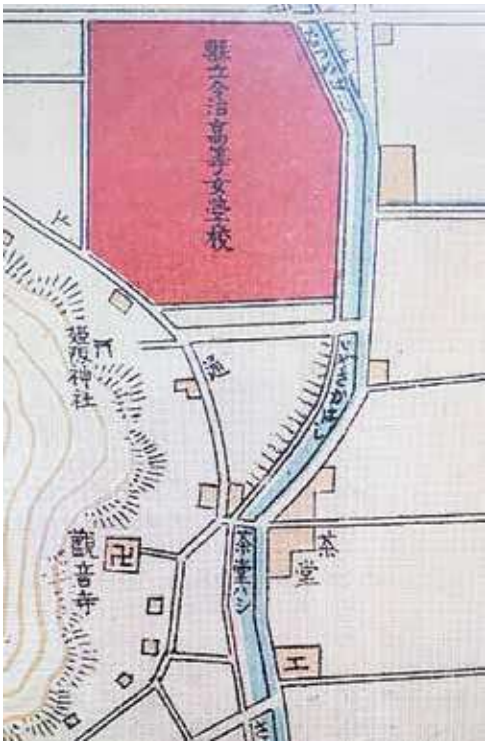
日吉茶堂の絵葉書（廣田整文堂発行）
※川下より木橋の茶堂橋を眺めた光景

昭和55（1980）年発行の『今治地方の伝説』（大沢文夫著）に、この茶堂の由来が紹介されています。要約すると「日吉村に住む長者が金銀財宝を隠そうと、闇夜に紛れて日吉山の麓に埋設した。この際、伴った下男の裏切りを恐れて帰路で斬り殺してしまう。その後、長者は下男の亡霊に毎晩うなされて病の床へ伏し、家族も病にかかって死ぬものまで現れた。これを解決するため、長者は下男を斬殺した場所の近くにお堂を建てて仏像を納め、仏門に入って下男の霊を供養し続けた。すると一家を襲う不可解な現象はなくなり、お堂そばに遍路の道標があったことで、そこでお茶の接待をして功徳を積んだ」というものです。

●茶堂にあった弘法大師像と茶釜

この茶堂は明治初期頃まであったようで、神仏分離の影響で廃れたと考えられます。安置されていた木造の弘法大師座像とお茶を沸かした青銅製の釜（内径30㎝弱）が、同著発行の頃は市内寺町７丁目（大正町）の青果商・土岐利一郎氏宅で保管されていました。茶釜に刻まれた銘は「文□十一年甲戌六月」と「伊豫今治日吉村／今治城下町／世話人／石孝」と判読でき、□の元号を十干十二支から【化】と推定すれば、江戸後期の1814年の制作となります。

では、文化11年頃の今治地方はどんな様子だったのでしょう。遍路文化に照らすと、大島の「島四国霊場」（文化４年）と今治平野の「府中二十一ヶ所霊場」（文化７年）の開創時期の数年後にあたり、当地方で写し霊場ブームが巻き起こった時期と重なります。すると、前述の弘法大師像（本体は幅約38㎝・高さ約38㎝）と茶堂本体も同じ文化年間造立の可能性が考えられ、伝説とは大きく違ってきます。



昭和７年の今治市街地図（文林堂発行）

●今治空襲で被災した南光坊へ

この弘法大師像と茶釜は、土岐家で保管されてきましたが、実家解体にともなって子孫が今治を離れることとなり、令和７（2025）年６月に最寄りの札所・南光坊へ寄進されました。現在は、同寺本堂にてお遍路さんたちを見守っているのです。

その南光坊には、今治空襲で亡くなった犠牲者を弔う「今治市戦災の碑」（2008年建立）があります。今治市では、中心市街地の約８割が焼失する今治空襲が昭和20（1945）年に３度ありました。少し事例をあげると、４月26日の爆弾投下では、城山通りに近い今治明徳高等女学校（現、FC今治高校明徳校）で教職員・生徒９名が、駅前広小路の今治郵便局電話交換室（現、NTT西日本今治支店ビル）で若い女性交換手10名が犠牲となりました。５月８日は御城山（姫坂山）が爆弾投下の標的となり、避難していた今治高等女学校（現、今治北高校）の生徒11名が亡くなっています。

南光坊は８月６日未明の焼夷弾投下で本堂などを失いますが、大師堂（大正５年建立）・金毘羅堂は焼失を逃れました。常盤小学校中庭のスズカケノキや寺町の常高寺・西蓮寺・法華寺の本堂なども戦災をくぐり抜けて今日にいたります。今治空襲では575名以上が亡くなったとされる中、これを語る証言者が少なくなりました。何気ない地名の背景にも埋もれた歴史があるように、地域史をしっかり未来へ継承し、平和を希求していきたいものです。


茶堂にあった弘法大師像と茶釜（今治市別宮町／南光坊本堂）